

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION

2019年度 改訂版

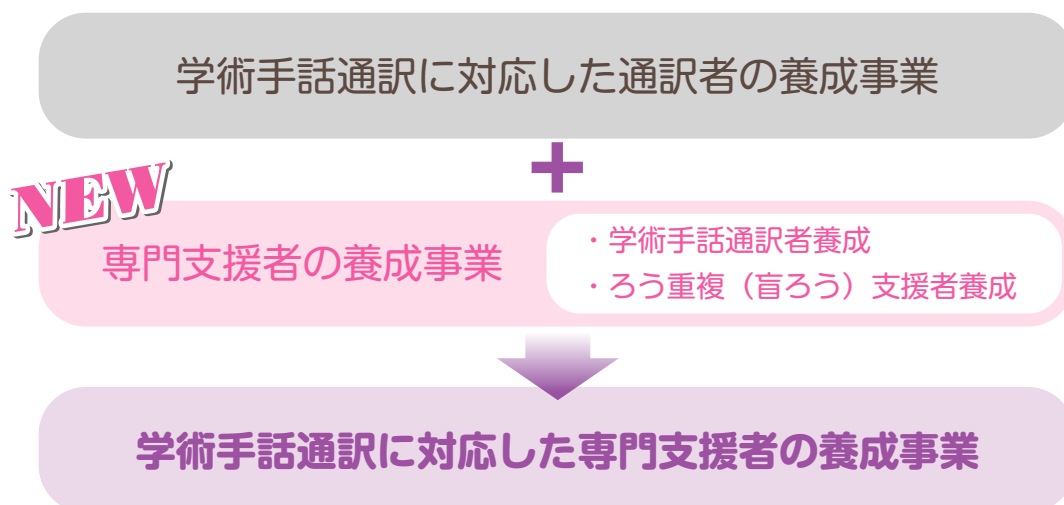
「学術手話通訳に対応した 専門支援者の養成」事業

手話サポーター養成プロジェクト

手話のチカラを
つなぐ



2019年度より事業内容がリニューアルしました！



もくじ

Contents

本事業がめざすこと	01
群馬大学長あいさつ	02
群馬県知事あいさつ・日本財団あいさつ	03
日本手話とは…？	04
「手話通訳者」になるまでのフローチャート	06
群馬大学における手話サポーター養成カリキュラム	07
群馬大学における専門支援者の養成カリキュラム	08
1年生の講義	10
2年生の講義	11
3年生の講義	12
もっと深く学びたい人のために	13
スタッフ紹介（手話通訳サポータープロジェクト室）	14 ~ 19
（客員教員・非常勤講師 他）	20
おわりに	21



教育学部 教授

金澤 貴之

現在、障害のある方々の大学進学が進む中で、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（いわゆる「障害者差別解消法」）が平成28年4月に施行されたことにより、そうした学生のニーズに応じた支援が法的に義務付けられ、支援体制の整備が全国的に急ピッチで進められています。特に聴覚障害のある学生の場合、大学の活動の核となる「授業」の音声情報そのものへのアクセスが困難な障害であるために、情報アクセシビリティの確保は大きな課題となっています。そしてその具体的な支援方法（情報保障）に関しては、パソコン等による文字通訳がようやく近年になり普及してきている状況です。しかしながら、聴覚障害学生の中でも、ろう学校等で手話を身につけたろう学生には、躍動感あふれる自然言語である手話による通訳を希望する者も少なくありません。にもかかわらず、手話通訳による支援体制は、学生を手話通訳者として養成することが困難であることや、地域の手話通訳者が必ずしも学術的な内容の手話通訳に長けているわけではないことなどから、残念ながらまだまだ普及が進んでいないのが現状です。

そのような状況にありながらも、国立大学法人群馬大学では、聴覚障害学生の手話通訳ニーズに対応した支援を実施すべく、全国に先駆けて手話通訳による情報保障の体制整備を進めてまいりました。平成16年度に教育学部で聴覚障害学生への情報保障のために手話通訳者を全国で初めて職員採用したことに始まり、平成17年度には手話通訳技術のある職員採用を含む、障害学生支援に関する学内規定を全学的に整備し、そして現在、障害学生サポートルームには聴覚障害当事者である職員も常駐し、学内の有資格者に加え、群馬県内で活躍する手話通訳者の方々のご協力をいただきながら、手話通訳ニーズのある聴覚障害への情報保障に積極的に取り組んで、今日に至っております。

一方、群馬県は平成27年3月に全国の都道府県で3番目に手話言語条例を制定し、かつ、同年12月に前橋市でも同条例が制定されたことで、全国で初めて県と市の双方で同条例を制定した県となりました。さらには令和元年9月現在16ヶ所の市町村で同条例が制定され、全国屈指の手話言語条例制定県となっております。県条例においては聴覚障害児を対象とする学校における乳幼児期からの手話環境の整備等が記され、市町村条例においても学校における手話による支援が記されている自治体もあります。そうした自治体の動きに対して、教員養成を行う機関である本学としましても、広く学生に手話についての知識と技術を教授していくとともに、特に特別支援学校教員を目指す学生には教育現場で活用できる確かな手話の技術の習得が求められているところです。

以上のことを背景とし、2017年度から群馬大学では日本財団から助成を受け、群馬県との共同事業として本事業に着手いたしました。本事業では、主として以下の4点について実施することで、自治体が制定した手話言語条例への学術機関としての貢献として、手話通訳者の養成、技術の質の向上を図るとともに、高等教育機関における聴覚障害学生の手話通訳ニーズへの対応の充実を目指してまいりました。すなわち、①手話習得（学部1年生）、②手話通訳技術の習得（2年生～3年生）、③本講座修了生が「手話サポーター」として聴覚障害学生の支援者として活動（4年生）、④地域の手話通訳者向けの学術手話通訳養成研修です。そしてさらに今年度からは、新規事業として、ろう重複障害者の支援者養成にも着手いたしました（厚労省が定める盲ろう者通訳・介助員養成カリキュラムの内容を含む）。これにより、手話通訳技術を3年間で習得した学生が、さらに4年目には、知的障害等の重複障害を併せ有する聴覚障害児者への支援技術を身につけることができるよう、進めてまいります。

さらに今年度はスタッフを補強し、手話指導および手話通訳養成のテキスト・カリキュラムの開発も進めております。

皆様方からのご指導、ご鞭撻、そしてご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



群馬大学長
平 塚 浩 士
Hiroshi Hiratsuka

群馬大学は、全国的にみても障害のある学生への支援体制が必ずしも十分ではなかった時代から、先駆的に障害学生支援に取り組んできた大学の1つです。特に、平成17年度に「群馬大学障害学生修学支援実施要項」を制定し、それまで各学部で個別に行っていた障害のある学生への支援を全学的に統一するとともに、専門支援者を職員として雇用することを明文化したことは大きな一歩となりました。このことにより、手話通訳を必要とする聴覚障害学生に対しては、専門的な手話通訳技術を持つ職員を採用する取り組みが全学的に始まり、全国的に注目されることとなりました。平成22年度からは、障害学生支援室を全学組織化し、その意思決定のもと、障害学生サポートルームの職員が日々、障害のある学生の支援にあたっています。

このように、聴覚障害当事者の職員と手話通訳技術を持つ職員が常駐していることにより、他の学生と同様に聴覚に障害のある学生が安心して勉学に取り組むことができる環境を充実させることは、共生社会を大学の中で実現させていく上で非常に大切なことだと考えております。

平成29年度からは、群馬県との共同事業として、日本財団助成「学術手話通訳に対応した通訳者の養成」事業を開始いたしました。順調に2年目を終え、3年目となる今年度からは、「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」と事業名を改め、ろう重複障害者の支援者養成も組み込みました。この拡張した事業を通じて、聴覚に障害のある学生に対する教育が充実すると同時に、手話通訳等の聴覚障害者への支援技術をもつ学生も育成され、さらに地域の手話通訳者の研修の機会も広がることを期待しています。

「共生社会の実現を目指して」



群馬県知事
山本 一太
Ichita Yamamoto

群馬県では、平成27年4月に「群馬県手話言語条例」を施行し、手話が言語であるとの認識に基づき、ろう者とろう者以外の者が相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現を目指しています。

また、平成28年10月には、条例の趣旨を踏まえて「群馬県手話施策実施計画」を策定し、手話の普及啓発を推進しています。この計画では、手話に関する調査研究への支援や手話通訳者の養成等に取り組むこととしており、平成29年度から群馬大学と共同して、「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」事業を実施し、ろう者が高等教育機関で学ぶ機会の確保を推進しています。

本事業により養成された専門支援者が県内外で活躍し、手話通訳者の質の向上が図られるとともに、この取組が全国に広がり、ろう者への支援に大きく貢献することを期待し、挨拶とします。

「多様性にあふれたインクルーシブな社会に向けて」



日本財団 ソーシャルイノベーション本部
特定事業部 部長 公益事業部 部長（兼）
石井 靖乃
Yasunobu Ishii

2020年東京オリンピック・パラリンピックを迎えるにあたり、かつてなかったほど多様性とインクルージョンの重要性につき語られる機会が増えています。日本では十分に浸透しているとは言えませんが、「言語としての手話」を認めることは多様性を尊重する社会の要件であり、また国連障害者権利条約第9条が求める専門的な手話通訳の提供もインクルーシブな社会の要件であると言えるでしょう。

群馬大学が実施する本事業は、2020年に向けた機運の高まりが単なる掛け声に終わることなく、真に多様性にあふれたインクルーシブな社会を実現するための取り組みです。そして、国連障害者権利条約締約国である日本が国際的な約束を果たしていくためにも欠かせません。私たち日本財団は、本事業が時宜を得た極めて重要な取り組みであると認識し、その責任の一端を担う気概をもって支援しています。

日本手話とは…?

「手話」とは、耳が聞こえない「ろう者」同士が用いている視覚言語です。そして音声言語が国によって異なり、日本語、フランス語、中国語などがあるように、手話もまた国によって異なり、日本手話、フランス手話、中国手話などがあります。

日本のろう者が、ろう者同士で話す時に用いる日本手話は、音声日本語とは同期せず、語順も異なります。例えば「何?」「どこ?」などの疑問詞は日本手話では文末に置かれます。



いつ運動会をするのですか?



運動



会



する



いつ

動画はこちらからご覧いただけます▶▶▶
<https://youtu.be/Fm2wqg8obVY>





さらに、手話は手だけで表現されるものではなく、眉や顎、目線の動きや口形などが文法的な機能を果たすことも近年になって明らかにされてきています。



もしも雨が降ったら、運動会は延期になります。



雨（眉上げ）



うなずき



運動



会



延期



動画はこちらからご覧いただけます ▶▶▶
<https://youtu.be/BDFJz0-39eA>



つまり、音声言語と同様に、完成された統語構造をもつ独立した言語であることが、現在は様々な学問的知見によって示されています。

しかしながらその一方で、手話は長い歴史の中で誤解され続けてきました。聴覚障害児教育の歴史の中では、「身振りのようなもの」であり、「不完全なもの」だと言われ続けてきました。また現在でも、多くの人たちの間では、音声言語に手話単語をつけて話すものが手話であると誤解され続けています。

日本手話が、日本のろう者で用いられている自然言語である以上は、手話を学ぶ際には、英語や他の外国語を学ぶのと同様に、文法の理解も必要ですし、言語習得理論に則った会話の学習も重要になります。だからこそ、学術機関である大学で、手話言語学等の学術的成果を踏まえた授業および体系立てたカリキュラムを用意する必要があると考えています。

「手話通訳者」になるまでのフローチャート

手話奉仕員 養成講座

意思疎通支援事業の一つであり、市町村の必須事業でもある。
手話のできる者（手話奉仕員）を養成する事業であり、住民が手話を本格的に学ぶための講座。
厚生労働省認可のカリキュラムに則って実施される。
入門課程と基礎課程があり、これらを修了することで、都道府県等が実施している手話通訳者養成講座を受けることができる。

- 入門課程（1年）
- 基礎課程（1年）

【市町村必須事業】

手話通訳者 養成講座

意思疎通支援事業の一つであり、県及び政令指定都市、中核市の必須事業。
「手話通訳」の技術を有する「手話通訳者」を養成する事業である。受講条件が、手話奉仕員養成講座を修了した者、ろう者との手話での会話が可能な者としている。
厚生労働省認可のカリキュラムがあり、基本課程、応用課程、実践課程すべての課程を修了した者が、手話通訳者となるための試験を受けることができる。

- 基本課程（1年）
- 応用課程（1年）
- 実践課程（1年）

【都道府県、政令指定都市、中核市の必須事業】

手話通訳者全国統一試験受験資格

手話通訳者 試験

手話通訳者になるための試験について、群馬県では下記のとおり実施している。

・手話通訳者全国統一試験

社会福祉法人全国手話研修センター主催の全国共通の試験。毎年12月に実施。
群馬県内で受験する場合、群馬県聴覚障害者コミュニケーションプラザにて実施。

・群馬県手話通訳者認定試験

群馬県聴覚障害者コミュニケーションプラザで実施している試験。
手話通訳者全国統一試験に合格した者が受験する。

全国手話通訳者統一試験が一次試とすると、この試験は二次試験に相当する。

統一試験および認定試験両方を合格した場合、群馬県知事の認定を受けて「手話通訳者」として活動することができる。

※手話を学び始めてから手話通訳者養成カリキュラム修了まで、最短で5年。
しかし、手話通訳者試験に合格できる者は、極めて少ない。

12月 ● 手話通訳者全国統一試験（一次試験）

3月 ● 群馬県手話通訳者認定試験（二次試験）

群馬県認定手話通訳者

群馬大学における手話サポーター養成カリキュラム

基本手話 習得コース

学部1年次開講講義

前 期

言語としての日本手話実践 I

言語としての日本手話 I

手話とろう文化

後 期

言語としての日本手話実践 II

言語としての日本手話 II

手話と情報アクセシビリティ

手話通訳 養成コース

学部2～3年次開講講義

日本手話と日本語の違いを学ぶ I

日本手話と日本語の違いを学ぶ II

日本手話と日本語の違いを学ぶ III

手話通訳者全国統一受験資格試験受験資格

手話通訳者 試験

12月 ● 手話通訳者全国統一試験（一次試験）

3月 ● 群馬県手話通訳者認定試験（二次試験）

群馬県認定手話通訳者

〈参考〉

※手話通訳士とは？

- ・厚生労働大臣認定の資格であり、毎年9～10月に「手話通訳技能認定試験（手話通訳士試験）」が実施される。（実施法人：社会福祉法人聴力障害者情報文化センター）
- ・試験合格後、手話通訳士登録を済ませた者は、「手話通訳士」を名乗って、手話通訳活動を行うことができる。
- ・手話通訳士のみ、政見放送の手話通訳をすることが可能である。
- ・群馬県では、手話通訳士資格登録後に、「群馬県手話通訳者認定試験」を受験・合格した者が群馬県認定手話通訳者として活動することができる。

■群馬大学における専門支援者の養成カリキュラム

学術手話通訳者

開講講義

群馬大学・学生

聴覚障害教育演習C

地域手話通訳者

※地域手話通訳者にも公開

ろう重複（盲ろう）支援者

発達の視点を踏まえた支援スキルの習得を図る

開講講義

上級コース
(教育学部生※向け)

学部4年次

聴覚障害教育演習D
聴覚障害教育演習E

専攻科専修
免許コース

コミュニケーション支援特講A・B

※3年間の手話通訳養成コースを終えた学生が対象（2020年度から開講予定）

開講講義

基本コース

(教育学部 特別支援
教育特別専攻科生※向け)

- ・ 手話初級相当の講義
- ・ 重複障害児に関連した講義

重複障害児の心理概論

知的障害児の教科指導概論

聾重複障害児の教育概論 I・II

(厚生労働省 盲ろう者向け通訳・介助員の養成カリキュラムに対応)

障害者支援概論

※専攻科・教員免許保持者を対象とした特別支援学校免許取得を目的とする1年制のコース（2019年度より実施）

ろう重複障害者支援者養成プログラム (特別支援教育特別専攻科向け)

今年度から実施!

聾重複障害児の教育概論Ⅰ・Ⅱ

担当: 前田 晃秀 (客員准教授)

厚生労働省盲ろう者向け通訳・
介助員養成カリキュラムに対応

盲ろう児・者支援に必要な知識・技能を学びます



触手話・指点字・ブリスト(点字を打つ機械)などを用いて通訳の練習をします。また、移動介助の方法についても学びます。盲ろうの当事者にご協力いただき、通訳・介助の実習もします。



※盲ろう者とは・・・視覚と聴覚の両方に障害のある者。
失明・失聴の時期がいつなのか、残存している視力・聴力がどのくらいなのか、等によってコミュニケーション方法が異なる。



重複障害児の発達の
観点からの講義

重複障害児の心理概論 (盲ろう児の心理を含む)

担当: 中村 保和 (障害児教育講座准教授)

知的障害児の教科指導概論 (ろう重複児の指導を含む)

担当: 木村 素子 (障害児教育講座准教授)

障害者支援概論

担当: 金澤 貴之 (障害児教育講座教授)

1年生の講義

受講生約 20 名 × 2 クラス



受講生約 100 名



※手話を第一言語とするろう者が持つ文化

2年生の講義

受講生約20名

講義名「日本手話と日本語の違いを学ぶⅠ」（手話通訳者養成基本コース相当）

前の週の課題の確認をしながら、通訳技術を学んでいます。



2人ペアになって手話の動画を撮影し合っ、気づいたことをコメント。
「“頷き”のタイミングが上手！」等、相手の良いところを見つけます。

	月	火	水	木	金	土日
第1週				講義日	課題提出①	課題の練習
第2週	課題提出②		課題提出③	講義日		

課題の多くは音声聞いて手話を出する、「聞き取り通訳」。
課題は、クラウド上で管理。
週3回の課題をこなすことで、2日に1回、手話に触れる時間を確保できます。
最初は恥ずかしがっていても、ビデオ撮影にだんだん慣れてきます。



撮影中。
順番待ちの人が後ろで練習をしています。



動画を見ながら手話の練習中。
ときには和気あいあいとおしゃべりも。



3年生の講義

受講生約20名

講義名「日本手話と日本語の違いを学ぶⅢ」（手話通訳者養成実践コース相当）

講義は、読み取り通訳の練習、OJTのフィードバックを中心に行なっています。



OJTの手話動画の一部を日本語に書き起こし、手話での表出方法をじっくり考えて動画を撮影します。

空きコマにOJT（通訳実習）を行なっています。

【ある学生の受講スタイル】

	月	火	水	木	金
第1週		講義日	手話通訳実践 OJT	翻訳の課題	
第2週		講義日	手話通訳実践 OJT	翻訳の課題	

講義中の教室の後方で手話通訳をし、その様子を動画に撮影しています。

OJTの後は報告書を記入。動画チェックは講師だけでなく他のスタッフも一緒に。コメントは講義時に返しています。



わからない単語は自分で調べたり、翻訳しづらいフレーズを講師に質問したりして確認した後、撮影に挑みます。

まずは5分間から始めて…
(今は15分間を目標に) 少しずつ通訳時間をのばしています！

■もっと深く学びたい人のために…

聴覚障害指導法

担当：甲斐 更紗



ろう者の講師による「聴覚障害指導法」という専門科目は手話で講義が進みます。手話通訳者はつけずに学生が講師の手話をそのまま読み取り、理解します。(希望者のみ)



講義での感想・質問などは手話で。動画をクラウドに提出します。



聴覚障害教育演習 C

担当：清水 由紀恵
(ゲスト講師、坂戸ろう学園教諭)

ろう学校幼稚部の先生をお招きして、聞こえない幼児さんのための絵本読み聞かせの知識と技能を学びます。

絵本選びのときに考えるべきことや絵と手話をうまく組み合わせる方法などの理論も交えて実践します。

絵本を出すところから物語は始まります！



お手本を見て…いざ実践！



スタッフ紹介



群馬大学 教育学部 教授
本プロジェクトリーダー

金澤 貴之

学部生の頃、教育実習で当時東京で唯一手話を幼児期から用いていたろう学校に配属されたことをきっかけに、「手話を覚えなくてもろう学校の教員になれる」という大学での教育のあり方に疑問を感じ、「なぜ、ろう学校で手話が使われてこなかったのか?」という疑問を持って、ろう教育の社会学的研究に取り組み始めました。ろう学校での手話の位置づけについて、修士論文のテーマとして取り組む一方で、初めて出会った同年代のろうの大学院生から、「ろう教育の研究をしているのに、手話もできないの?」と怒られつつ、ろうの方々とのつきあいの中で、手話を学んでいきました。

その後、聴覚障害のある学生が群馬大学教育学部に入学したこと、そしてその翌年には手話通訳を求めるろう学生が入学したことで、大学としてろう学生の情報保障にどう応えるか、特に手話通訳ニーズにどう応えるかが、自分にとってライフワークの1つとなっていきました。そして1つ1つの課題をクリアしつつたどり着いた答は、大学がろう学生にとって真にインクルーシブな場となるためには、究極的には、プロに授業の手話通訳をお願いするだけでなく、大学全体に手話が広がり、共に学ぶ学生たちみんなが手話で話せるような環境を実現させなければならない、ということです。

そして今年度、ようやくその第一歩を踏み出すことができました。

群馬大学に手話の花が咲き、それが広がっていくことを、ぜひみなさま、暖かく見守っていただき、そして応援していただけたらと願っております。

PROFILE

東京学芸大学を卒業、同大学院修士課程を修了し、筑波大学大学院博士課程を中退。

筑波大学文部技官、助手を経て、2000年4月から、群馬大学教育学部障害児教育講座に講師として着任。現在、同大学教授。「聾教育における手話の導入過程に関する一研究」で2013年3月博士（教育学）取得。

以後、群馬県手話言語条例（案）研究会委員（座長代理）（2014年度）、前橋市手話言語条例制定研究会アドバイザー、同意見交換会委員（2015年度）、群馬県手話施策推進協議会委員 副会長（2015年度～）等、群馬県内外の自治体の手話言語に関する施策推進に大きく寄与。

日本高等教育聴覚障害学生支援ネットワーク（PEPNet-Japan）設立時の2004年度から運営委員として、全国の聴覚障害学生支援の体制整備に尽力。

主な著書

編著『聾教育の脱構築』（明石書店、2001年）

編著『一歩進んだ聴覚障害学生支援——組織で支える』（生活書院、2010年）

単著『手話の社会学——教育現場への手話導入における当事者性をめぐって』（生活書院、2013年）



群馬大学 教育学部 准教授
研究開発統括

中野 聡子

5歳で失聴した私は小学校からずっと通常校でしたが、勉強は独学、友人とのコミュニケーションはなるべく避けて過ごしてきました。そんな人生が一変するきっかけとなったのが大学入学後に覚えて使い始めた手話です。授業でも生活の中のコミュニケーションでも、補聴器を通してだいたいわかっていると思い込んでいたものがいかに虚構であったかを知り驚きました。授業は手話サークルの友人たちがシフトを組んで有償ボランティアで通訳を行ってくれました。そして何より、手話を使うことで私は人とかかわり、ふれあい、人間らしさを取り戻すことができたのです。

大学院進学後、ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業の留学生として1年間学んだアメリカでは、Deaf people can do anything except hear. (ろう者は聞くこと以外は何でも出来る)を体現するロールモデルと社会環境を目の当たりにして、環境さえ整えば、耳の聞こえない自分にできないことは何もないという確信を得ました。

そのような私にとって、仕事も生活もすべてが手話とともにあります。とりわけ、仕事をするにあたって手話通訳者は自分の分身であり、一心同体の存在です。けれど、大学教員として行う教育、研究、その他の業務…、これらに従事する中で、手話通訳の等価性が担保されていないと感ずることがありました。地方の大学への赴任をきっかけに、県の手話通訳派遣事務所のコーディネーターや手話通訳者団体の方々と手探りで学術場面を中心とした手話通訳者向け研修を行ったりするなどの試みを通して、現在は、手話通訳利用者の目線を活かしながら手話通訳者の訳出表現の分析を行い、手話習得や通訳養成上の課題を見出す研究を行っています。

本プロジェクトが、手話を通して、きこえない子ども / 大人のインクルージョンの実現を支える人々の輪を広げるきっかけになることを願ってやみません。

PROFILE

筑波大学人間学類心身障害学専攻を経て、筑波大学大学院心身障害学研究科修了。

博士 (心身障害学)。

手話言語の認知 / 言語発達における研究では、日本初のろう者による博士号取得となった。

東京大学先端科学技術研究センターでは障害者支援機器開発の研究、広島大学と大阪大学では障害学生支援の仕事に従事。かたわら、学術手話通訳養成の研究に取り組み、関連論文を多数発表。また、地域の手話通訳者を対象とした研修を企画開催してきた。

主な著書

共著『聾教育の脱構築』(明石書店、2001年)

単著『大人の手話 子どもの手話 一手話にみる空間認知の発達』(明石書店、2002年)

共著『手話による教養大学の挑戦—ろう者が教え、ろう者が学ぶ—』(ミネルヴァ書房、2017年)

オンライン学術手話通訳教材集 <https://sl-interpreting.org/> (2019年6月公開)

スタッフ紹介

● 学術手話通訳者養成チーム ●



群馬大学 教育学部 助教

能美由希子

大学入学時、同期に聴覚障害学生が居たという偶然で、手話と出会いました。「手話ってかっこいいし楽しい!」と感じ、より多く手話に触れたいとなり、ろう者の集まりと聞けば国内外問わず出向いてきました。

スタートは、そんな「楽しい」という気持ち1つでしたが、ある時手話通訳の世界に踏み入れる決意をしました。あるろう者から「聞こえる人はいつでも手話をやめられるけれど、聞こえない私たちは聞こえる人と関わらずには生きていけない」と言われたことがきっかけです。楽しいだけでなく、ろう者とともに生きていこうと思い、より深くこの世界に関わるようになりました。

通訳の資格取得以降は、必要とあらばありとあらゆる現場に出向いて、手話通訳・要約筆記を行っています。通訳の立場だからこそ得られる、ろう者や通訳仲間からの優しさと厳しさに支えられながら、その奥深さに日々惹きつけられるばかりです。

私は手話が好きです。手話通訳が好きです。妊娠・出産で一時期は離れてしまいましたが、それでも快く出迎えてくれるろう者や通訳仲間を支えられて、再び手話や手話通訳の世界にどっぷり浸かっています。

この事業を通して、手話を楽しめる仲間の輪を、手話通訳の苦楽を共にできる通訳仲間の輪を、少しずつでも着実に広げていきたいです。

PROFILE

筑波大学第二学群人間学類卒業、筑波大学大学院博士後期課程人間総合科学研究科単位取得満期退学。大学院在籍中より、つくば市特別支援教育支援員、茨城県立聴覚障害者福祉センター「やすらぎ」手話通訳コーディネータとして勤務。現在、群馬大学 教育学部 助教、長野大学社会福祉学部非常勤講師および日本手話通訳士協会政見放送実技講師。手話通訳士・要約筆記者。

専門は教育現場における情報保障で、住友生命(株)未来を強くする子育てプロジェクト第7回女性研究者奨励賞を受賞。本事業では、手話通訳養成にかかる指導法および教材の開発と授業実践・研究を主担当。



群馬大学 大学教育・学生支援機構
学生支援センター 産学官連携研究員

川端 伸哉

聞こえる人が音のない世界を「知る」ことは、未知の世界に足を踏み入れることと同じなのだと思います。それは、宇宙なのかもしれないし、銀河なのかもしれない。それは、単なる空想の世界であって、実は身近に存在しているのです。同時にその世界を「知る」ことで、これまで見えなかったものが見えるようになるかもしれません。私は生まれた時から、ずっと音のない世界の住人です。音のある世界を身近に感じるたびに、未だに驚きと発見があります。音のある方向に何があるのか。それを見つけるたびに、パンドラの箱を開けたような気持ちになります。そこには、音を教えてくれる人がいたからこそ、その箱を開けることができ、そのたびに人の繋がりを感じます。

手話というのは、音はないけれど、実は言語なのです。しかし、長い間言葉としてみなされず、様々な障壁、偏見がありました。それでも先人のろう者たちが大事に手話を守り抜いてきたからこそ、今やっと、手話が言語であることが認められたのです。群馬大学から「手話チカラ」の発信!とともに「手話チカラ」を育て、日本にあるもうひとつの言語、「日本手話」を身につけてみよう!きっと、あなたの概念が大きく変わることでしょう。そう、「日本手話」は素晴らしい言語なのだから。

PROFILE

つくば国際大学産業社会学部社会福祉学科卒業(上野益雄研究室)。日本社会事業大学大学院博士前期課程社会福祉研究科修了後、日本社会事業大学非常勤講師を経て、現在、群馬大学 学生支援センター産学官連携研究員および群馬大学非常勤講師。日本で初めて、日本手話(動画)で修士論文を提出。

専門はLGBT、社会福祉、日本手話。群馬大学では、ろう者による直接教授法による日本手話の指導を主担当。



群馬大学 大学教育・学生支援機構
学生支援センター 産学官連携研究員

下島 恭子

群馬大学大学院受験の際、聞こえる学生と同等の学ぶ権利を享受したいと日本手話による講義保障を申し出たところ、大学側で手話通訳が用意され、講義やゼミでは同時性の高い情報保障を受けながらの授業参加が叶いました。それから、はや15年。現在、高等教育機関で学ぼう・難聴学生は増え、それに伴い講義の通訳者は専門の知識を有し学術用語に対応した通訳技術が求められるようになっていきます。

大学で学問の知識を吸収し、自分の力を高めたいと願っているろう・難聴学生の学習環境を支えられる通訳が用意されることは、学生の貴重なポテンシャルを引き上げる（生かす）ためにも早急な課題だと思います。

また、聞こえる学生も言語としての日本手話を学ぶ中で「ろう文化」と出会うでしょう。異なる文化を通して新しい観点を捉え、この社会の在りようを見つめ、共に考えていくことができたらと願っています。

PROFILE

女子美術大学卒業後、群馬県聴覚障害者情報提供施設コミュニケーションプラザ聴覚障害者相談員を経て、群馬大学大学院教育学障害教育専攻修了。修士論文のテーマは「日本手話による教員からろう児への語りかけに関する一考察～うなずきの機能に着目して～」。ろう・難聴児のためのフリースクール「群馬デフフリースクールココロ」を設立。群馬初の聴覚障害児に特化した放課後等デイサービス聴覚障害児児童クラブきらきらで管理者兼児童発達支援管理責任者を2年間務める。前橋国際大学非常勤講師・地域の手話奉仕員養成講座講師、県通訳者養成講座講師、PEPNet-Japan第二事業手話通訳分析メンバーを経験。



群馬大学 大学教育・学生支援機構
学生支援センター 産学官連携研究員

山本 綾乃

私は群馬大学で初めてのろう学校卒のろう学生ということで、専攻内では様々なコミュニケーション手段に取り組んでいただきました。講義での情報保障であるパソコンテイクや手話通訳はもちろんのこと、講義以外の空きコマやサークル活動などの時間を、同級生と円滑に楽しく充実した大学生活を過ごせるように。彼らは私と話がしたいと積極的に手話を覚えてくれ、少しずつ手話の輪が広がり、とても嬉しかったことを覚えています。

現在、群馬大学には手話サポーター養成プロジェクトが設立され、大学1年次から、ろう学校の教員や手話通訳士になることを見据えた上での、確かな手話を学ぶことができます。聴覚障害児者にとっての“分かる授業”のためには、手話も数ある選択肢の中の一つとして重要な役割を担っています。ぜひ一人でも多くの方に手話の世界に足を踏み入れていただけたらと思います。

手話の輪が群馬大学から全国へ更に広まることを願っています。

PROFILE

群馬大学教育学部障害児教育専攻卒業。日本財団聴覚障害者海外奨学金事業第10期生としてアメリカへ留学。オーロニ大学集中大学準備プログラム（IUPP）を経て、世界で唯一の聴覚障害者のための総合大学であるギャロデット大学大学院ろう教育学部特別プログラム卒業後、文化交流プログラム（オペアプログラム）にて、2年間ろう児の生活支援に携わったのち帰国。現在、群馬大学学生支援センター産学官連携研究員。専門はろう教育、初等教育。

スタッフ紹介

ろう重複(盲ろう)支援者養成チーム



群馬大学 教育学部 助教

二神 麗子

ろう者は音声日本語とは異なる、日本手話という言語の中で生きています。しかし、日本で生まれ育ったほとんどの人は、「日本人は全員、日本語を話す」と信じて疑わないため、見た目は日本人でも異なる言語(=日本手話)を話すろう者に会うと、最初は戸惑ってしまうと思います。でも、ろう者も私たちと同じものを見て、手話という言葉を通じて感動を共有することができるのです。

みなさんも私と同じように、手話という言語に触れることで、これまで知らなかったろう者の世界や相手と心を通わせること、コミュニケーションの大切さ、尊さを改めて知ることができます。さらに、本学で手話通訳を学び、実践することで、あなたは異なる世界の橋渡しの役割を担うことになります。それは、障害の有無によって様々なことが左右されない、差別されない平等な社会を築くための、小さな、けれどもとても大きな意味のある一歩になることでしょう。

PROFILE

日本社会事業大学社会福祉学部卒業、群馬大学大学院修士課程教育学研究科を修了。大学勤務の傍ら、立命館大学大学院博士後期課程先端総合学術研究科に在学し、ろう学校へのスクールソーシャルワーカーも務める。社会福祉士・手話通訳士。専門は社会福祉、聴覚障害ソーシャルワーク、障害者政策。研究テーマは手話言語条例の制定過程における当事者関与のあり方。



群馬大学 教育学部 助教

甲斐 更紗

手話が皆さんにとっての心の拠り所でありますように。多くの方が様々な面での手話アクセシビリティ向上における一翼を担う存在になれることを心から願っています。

私自身、ろう者(聴覚障害者)で、ろう学校(現在の聴覚特別支援学校)出身で、大学のときにノートテイクや手話通訳で授業を受け、大学院のとき、手話話者である指導教官と出会い、手話で直接指導が受けられた修士・博士課程は「手話で学ぶ、手話で議論する、手話で語り合う」ことが保障されたアカデミック的に貴重な時間でした。そのような経験があるからこそ、高等教育は障害学生にとっては知を深めてくれるものであり、知によって不公平さ、世の中の不条理を越えられる、考えることや語り合うことは生きる力になると考えています。それを支えるのは手話による直接的な対話、手話アクセシビリティや學術手話通訳による合理的配慮とかそういうものだ。

そして、私が大学生の時、手話や聞こえない・聞こえにくい自分を否定的に捉える仲間たち、コミュニケーションの制約を受けたため十分にところが育ってきたとはいえない方々と出会ってきました。彼等の悲惨なところの傷と向き合う中で、心理療法、心理アセスメントなどが音声を媒介としたものであるため、彼等が心理臨床の対象から除外されてきたという現状に愕然とし、彼等への手話による心理臨床分野へのエンrollmentマネジメントに取り組むようになりました。手話で学べる、手話で生きる、手話で仕事ができるという取り組みが大きく広がっていくことを願ってやみません。

PROFILE

多摩美術大学美術学部卒業。兵庫教育大学大学院修士課程・博士課程修了。博士(学校教育学)。鹿児島大学教育学部コーチング研究員、国立障害者リハビリテーションセンター研究所流動研究員、立命館大学生存学創成拠点ポストドクトラルフェロー、九州大学基幹教育院特任助教を経て、現在は群馬大学。臨床心理士、精神保健福祉士。その傍ら、10年間聴覚障害者情報提供施設で心理相談員、5年ほどろう学校のスクールカウンセラーに携わってきた。専門は臨床心理学、聴覚障害学生支援。主な業績として、「聴覚障害児の学習と指導 発達と心理学的基礎」(共著、2018年)、「聴覚障害学生の意思表示支援のために—合理的配慮につなげる支援のあり方—」(共著、2017年)、「聴覚障害者の心理臨床2」(共著、2008年)など。

群馬大学 教育学部 准教授

中村 保和

PROFILE

群馬大学を卒業、同大学大学院を修了後、東北大学大学院博士課程後期に編入学。2008年3月に博士号（教育学）を取得。2007年から着任した福井大学教育地域科学部発達科学講座講師を経て、2011年4月に群馬大学教育学部障害児教育講座に准教授として着任する（現在に至る）。講義では主に重複障害教育総論や盲ろう教育総論などを担当。専門は先天盲ろうおよび感覚障害を有する重度・重複障害の子どもの初期コミュニケーション。先天盲ろうに肢体不自由や知的障害、病弱等を併せ有する子どもたちとの係わり合いを通して、初期コミュニケーションや探索活動、学習をテーマとした研究を行っている。

群馬大学 教育学部 准教授

木村 素子

PROFILE

群馬大学を卒業、横浜国立大学大学院を修了後、筑波大学大学院博士五年一貫課程に入学。2011年、博士（障害科学）取得。2007年より宮崎大学教育文化学部障害児教育講座講師、2012年、同特別支援教育講座准教授を経て、2016年より群馬大学教育学部障害児教育講座に准教授として着任。講義では、障害児教育学総論、知的障害児の教育課程、障害児教育授業づくり特論、特別ニーズ教育特論等を担当。専門は、障害児教育学、聴覚障害教育学。米国における公立通学制ろう学校史研究のほか、近年は特別支援学校に在籍するろう重複障害児の在籍・支援に関する調査研究を行っている。



客員教員・非常勤講師紹介



客員教授
金沢大学
人間社会研究域学校教育系
教授

武居 渡

担当授業
「聴覚障害指導法」



客員教授
筑波技術大学
障害者高等教育研究支援センター
准教授

白澤 麻弓

担当授業
「聴覚障害教育演習C」



客員准教授
東京都盲ろう者支援センター長

前田 晃秀

担当授業
「聾重複障害児の教育概論Ⅰ・Ⅱ」



非常勤講師
宮城教育大学 教育学部特別支援
教育教員養成課程 准教授

松崎 丈

担当授業
「聴覚障害児の心理」

障害学生サポートルーム・学生支援課紹介

障害学生サポートルーム

専門支援者 **古川 香**
岩崎 紗恵

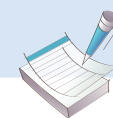
聴覚障害学生が円滑に修学出来るよう、情報保障コーディネート（手話通訳・パソコンテイク）等の支援業務を行っています。



学務部 学生支援課

課長 **青木あずさ**
副課長 **田中みゆき**
学生支援係長 **西川 二郎**
学生支援係員 **宇敷 友紀**

手話サポーター養成プロジェクトの事務的サポートを行っています。





群馬大学理事（教育・企画）
副学長
峯 岸 敬

我が国は今、多様性のある人々の共生社会の実現に向けて、様々な角度からの取り組みが進められております。2016年2月に閣議決定された「ニッポン一億総活躍プラン」においては、「一億総活躍社会は、女性も男性も、お年寄りも若者も、一度失敗を経験した方も、障害や難病のある方も、家庭で、職場で、地域で、あらゆる場で、誰もが活躍できる、いわば全員参加型の社会である」と述べられており、今年6月21日に閣議決定された「経済財政運営と改革の基本方針2019」（いわゆる「骨太の方針」）の中でも、「共生社会づくり」については肉厚に盛り込まれているところです。

特に情報アクセシビリティについては、遠隔手話通訳・文字通訳による聴覚障害者向けの「電話リレーサービス」の制度化など、2020年のオリンピック・パラリンピックの開催に向け、急ピッチで整備が進められている状況もあり、また、高等教育機関で学ぶ障害学生や高度専門職に就く聴覚障害者支援のニーズもあり、支援人材の育成が強く求められております。

そうした中にあり、本事業は来るべき共生社会の実現のための一助として、貴重な役割を果たしていくものと確信しております。本事業の関連授業を通じて手話に触れた学生が、それぞれの専門分野に進み、社会に巣立った後に、「あの時に覚えた手話」が役立ち、人と人をつなぐ架け橋になってくれたらと願っております。また、本事業の最終課程まで修了した学生が、手話通訳の資格を取得し、さらに重複障害者の支援技術も習得し、特別支援学校などの専門分野の第一線で活躍してくれれば、この上ない喜びです。

群馬県は、群馬県はじめ各地の市町村で手話言語条例が制定された、いわば「手話の先進県」であり、聴覚障害児の手話の環境整備など、様々な施策が行われています。本事業は、その県の施策を後押しすべく、県との共同事業として2017年度から始めたものであります。この事業を通して、ますます群馬県が「誰もが暮らしやすい街」となるよう、さらに一層、障害者支援の人材育成、支援体制の構築をめざしていきたいと考えております。



●表紙デザイン

ことばソムリエ かえで (川端伸哉)

雅号は溪楓。師範助教授。

群馬から「手話力(しゅわぢから)」を発信し、全国に広げていこうという想いを込めて作成した。

「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」事業パンフレット 改訂版
2020年1月発行

国立大学法人 群馬大学

手話サポーター養成プロジェクト室

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4丁目2番地

<http://sign.hess.gunma-u.ac.jp/>

TEL 027-220-7157(直通) FAX 027-220-7390

MAIL SLSDP@jimu.gunma-u.ac.jp